

O-0595

非特異的腰痛症に対する腰椎モビライゼーションの適応と効果 Modic 変化 Type2 に着目して

荒木 秀明

日本臨床徒手医学協会

key words 非特異的腰痛症・モビライゼーション・Modic分類

【はじめに、目的】我々は非特異的腰痛症例の運動療法施行時、腰椎、仙腸関節、股関節の疼痛誘発テスト陰性症例に腰椎モビライゼーションを施行している。しかし、疼痛による筋スパズムから偽陰性となる症例の鑑別に難渋するため、従来の理学検査に椎間板変性後の安定化が示唆される MRI の Modic 変化 type 2 分節への腰椎モビライゼーションの効果を検討した。

【方法】神経学的脱落所見を認めず 3 カ月以上の罹病期間を有する慢性の非特異的腰痛症 232 例中、各種疼痛誘発テスト陰性で MRI にて 1 椎間以上に Modic 変化 type2 を認め、腰椎他動運動テストで過小運動性を有した 42 例。内訳は平均年齢 64.2 歳、男性 18、女性 24 例。開始時に疼痛 (VAS)、指尖床間距離 (FFD) と Modified Shober Test (MST)、Oswestry Disability Index (ODI) を評価。無作為にモビライゼーション (MOB) 群：21 例、特異的安定 (STB) 群：21 例に分類。MOB 群は Modic Type 2 椎間に腰椎モビライゼーション、STB 群は四這いと側臥位で多裂筋収縮運動を施行。治療直後、理学所見を測定し、群間比較。

【結果】(1)VAS は MOB 群が有意に改善、STB 群は不変。(2)FFD は MOB 群で有意に改善、STB 群は不変。(2)MST は MOB 群で有意に改善、STB 群は不変。(3) ODI は MOB 群で有意に改善したが STB 群は不変。MOB 群で症状悪化例は無かった。

【考察】病理学的検討から Modic type2 は軟骨終板脂肪髄化と考えられ、腰椎機能撮影で過小運動性が指摘されている。今回 Modic type 2 と他動運動テストから腰椎モビライゼーションを施行して悪化することなく全例で腰椎可動域と ADL 機能で有意差を認めた。

【理学療法学研究としての意義】腰椎モビライゼーション施行する際、従来の他動運動テストに加え、MRI の Modic type 変化を加えた検討が安全で、有効であった。